

ご自身を否んだペトロを 愛されたイエス様

ヨハネ18章12～27節
2021年3月28日
松田 基子 師

受難週を迎えました。イエス様は最後のエルサレム上りにやってこられ、12章27節で、「わたしはまさにこの時のために来たのだ。」と言われた通り、人類の罪の贖い(あがない)の為に、十字架に架かる事を覚悟なさっていました。弟子たちに、父なる神様を信じ、御自身を信じて、従って来ることを語られ、最後の晩餐を終えられますと、弟子たちと共に、谷向こうの園、ゲツセマネの園に向かわれました。

イエス様はそこで、父なる神様に、切なる祈りを献げられました。そこに、ユダに手引きされた人々が、松明(たいまつ)や灯火、武器を手に、イエス様捕縛にやって来ました。イエス様は、18章4節で、御自身の身に起こることを、何もかも知っておられ、進み出て、

「誰を捜しているのか。」

と問われ、彼らが、

「ナザレのイエスだ。」

と答えると、イエス様は、

「わたしである。」

と答えられました。その時、シモン・ペトロはイエス様を守ろうと、剣を抜いて、大祭司の手下に打ちかかり、右の耳を切り落としました。

イエス様はペトロに、

「剣をさやに収めなさい。父がお与えになった杯は、飲むべきではないか。」と、言って、御自身から捕らえられて行かれました。

その時、イエス様を捕縛に来た人々と言うのは、12節に、一隊の兵士と千人隊長が記されています。そこには既にローマ兵が来ていました。一隊と言うのは、約600人から成り、その指揮官として、千人隊長が来ています。彼らに加えて、ユダヤ人の下役達がありました。ユダヤ人の下役達と言うのは、神殿関係や、大祭司の職務のために、使われている人々の事です。イエス様

が愈々(いよいよ)この世の罪と対決なさる時が来ました。

そのためにイエス様は、この世の支配者、権力者と対峙されます。イエス様が捕縛に来た人々に身を任せられますと、彼らは、イエス様を縛り、大祭司の屋敷につれて行きました。その時の正式の大祭司は、カイアフアでしたが、彼のしゅうとアンナスは、以前の大祭司で、大祭司の職を退いて後も、権力を持っていました。非常にずるい策略家で、職位を退いてからも、自分の息子たちや、婿のカイアフアを大祭司職に就けて権力を振るっていました。

下役達もアンナスの意に従っていました。彼らはイエス様を直接カイアフアのもとに連れていくことはせず、先ず、アンナスのもとに連れて行きました。ところでアンナスの婿のカイアフアは、前に11章50節で、

「一人の人間が民の代わりに死に、国民全体が滅びないで済む方が、あなた方に好都合だとは考えないか。」

と助言を与えた人物です。宗教指導者達は、そのように動いていました。そこでイエス様は、大祭司の屋敷に連れて来られたのでした。

一方、シモン・ペトロともう一人の弟子、それは12弟子の一人なのか、他の弟子なのか確定されていません。彼らは、他の弟子たちが逃げ去った中で、イエス様が心配で、後から付いてきました。しかし、大祭司の屋敷へは、誰でも入る訳ではありません。そこには門番の女中がいました。ペトロと一緒に付いて来た弟子は、

「大祭司の知り合いだった。」

と記されているところから、

『一般庶民ではなかったであろう』

とされています。

その彼のお陰で、ペトロも中に入れて貰える事になったのですが、18章17節を見ますと、門番の女中はペトロに問いました。

「あなたも、あの人のお弟子の一人ではありませんか」

岩波訳では、

『まさかあんたも、あの人の弟子の
一人じゃなからうね。』

と言う聞き方になっていて、その答えは打ち
消し易い

『そんな事はありません。』

と言う答えが期待される問い掛けであった。」
とされます。そこで、ペトロはアッサリと相手の
危惧を打ち消す答えである、

「違う」

と答えてしまいました。

彼は咄嗟に、自己保身に動きました。しかし、
彼は次の瞬間、

『違うと答えなければ、大祭司邸には入れて
貰えないのだから。わたしはイエス様が心配
なんだ。イエス様はどうなるのだろうか。今
は何としてでも屋敷に入ることが一番大事な
のだ。』

とペトロはそのように、自分に言い聞かせ、

『イエス様の弟子ではない。』

と言ったことの言い訳を、考えたのではないで
しょうか。中庭に入っていくと、大祭司邸の使
用人である僕や、下役達が寒かったので、炭火
を起こして火に当たっていました。

ペトロは一人離れてぼつんといふのも怪しま
れるに違いないと、彼らの間に紛れ込んで、火
に当たっていました。一方イエス様は、アンナ
スから予備尋問を受けられました。19節に、

「大祭司はイエスの弟子のことや
教えについて尋ねた。」

とあります。弟子たちまで捕らえようと言うので
しょうか。教えを聞いて、神様を冒瀆したという
罪状を、捜し出そうと言うのでしょうか。アンナ
スはずるい人間ですから、イエス様から何とか言
葉尻を捉え罪状を見つけて、次の尋問に送りた
かったに違いありません。

それに対して、イエス様は毅然(きぜん)として、
お答えになりました。イエス様の願いは、弟子
たちに危害が及ばない事でしたから、弟子たち
については一言も語られず、御自身を問題にす

るように、促(うなが)されました。20節から、

「イエスは答えられた。

『わたしは世に向かって公然と話した。

わたしはいつも、ユダヤ人が皆集まる会堂
や神殿の境内で教えた。ひそかに話し
たことは何もない。なぜわたしを尋問す
るのか。わたしが何を話したかは、それ
を聞いた人々に尋ねるが良い。その人々
がわたしの話したことを知っている。』

と記されています。

本来イエス様が捕縛されるべき存在なら、具
体的事実に基づいて、イエス様の罪状を告訴す
る人が、そこに居るべきでした。その手順も踏
むことなく、宗教指導者達は、自分達の保身の
ために、都合の悪い存在を消すためだけに、
自分達の都合で動いていました。イエス様は
彼らの不当性をここで指摘して、御自身は、

『常に、どこでも、誰に対してでも、同じ事を
語ってきたのだから、わたしの教えを裁きた
ければ、聞いた人々から聞きなさい。』

と言っておられるのです。

イエス様こそ、神様の真の御心を、この世に向
かってお語りになった、ただひとりのお方です。
イエス様は、ヨハネ8章12節で、

「わたしは世の光である。わたしに従う者は、
暗やみの中を歩かず、命の光を持つ」

と言われました。罪に支配され、闇の中に生き
ている者にとって、光は邪魔です。

ヨハネ3章20節で、イエス様は、

「悪を行う者は皆、光を憎む。その行いが明
るみに出されるのを恐れて、光の方に来ない
からである。」

と言っておられます。この世の闇の中に生きて
居る者には、この世の権力にしか、関心がありま
せん。イエス様が真理を語っておられるにも拘
わらず、イエス様の傍らにいた大祭司の手下の
一人が、

「大祭司に向かって、そんな返事のしかたが
あるか。」

と言って、イエス様を平手で打ったのでした。

イエス様はそのようなことで怯まれる方ではありま

せん。はっきりと罪を指摘されました。

23節に、

「何か悪いことをわたしが言ったのなら、その悪いところを証明しなさい。正しいことを言ったのなら、なぜわたしを打つのか。」

と言われたことに対して、下役は何も反論出来ませんでした。

人間には、この様に真理を選び取る力が、全くないのです。光であり、真理であるイエス様に繋がらない限り、人間には何が正しい事なのか解らないのです。ここにもう一人、闇に引き込まれそうになった人がいます。それはイエス様の一番弟子のペトロです。彼は大祭司の屋敷の中庭で、イエス様がどうなるのかを、はらはらしながら見守っていました。イエス様は縛られた儘、今度は正式の大祭司である、カイアファの前に連れて行かれました。中庭は続いていただろうと言われています。

そこでも、僕や下役たちが火に当たっていました。ペトロは彼らの間に紛れ込んで、火に当たりました。ペトロはイエス様を見守るために、大祭司邸の中庭に入ることが出来て、

「イエス様の弟子ではないでしょうね。」

と問われた時、

「違う」

と答えたことについては、自分なりの理由があり、それ程罪は感じていなかったでしょう。そのぐらいの心でなければ、危険を犯してイエス様に付いて来ることは出来ないでしょう。ところがまたしても、一緒に火に当たっている人々が、炭火の明かりを頼りに、目を凝らして、ペトロに見入り、

「お前も、あの男の弟子の一人ではないのか。」

岩波訳では、

「まさか、あんたも彼のお弟子の一人じゃなからうね。」

と問うてきたのです。

ペトロは既に否定したことであり、25節でその言葉を打ち消して、

「違う」

と答えました。すると26節に、大祭司の僕の一人で、ペトロに片方の耳を切りおとされた人の身内の者が言いました。

「園であの男と一緒にいるのを、わたしに見られたではないか。」

と決定的証拠を突きつけられました。しかし、ペトロはそれにも拘わらず、再び打ち消して、

「違う・・・、ちがう・・・、絶対に違う。」

と答えたのです。それは、唯々

『自分も捕らえられては大変な事になる。』と言う、本能的な、命の危険を感じたところから、出て来た言葉だったでしょう。しかし、次の瞬間、鶏が鳴いたのです。その鶏の声に、ペトロは、我に返りました。ペトロはあの最後の晩餐の席上、イエス様が言われた言葉を思い出しました。13章36節から、

「シモン・ペトロがイエスに言った。

『主よ、どこへ行かれるのですか。』

イエスが答えられた。

『わたしの行く所に、あなたは今ついて来ることにはできないが、後について来ることになる。』』

とあります。このイエス様の謎めいた言葉に、ペトロは37節で、

「主よ、なぜ今ついて行けないのですか。あなたのためなら命を捨てます。」

と言っています。

ペトロはその時は、

『イエス様のためなら、命を捨てても惜しくない』

と思ったのです。しかし、イエス様は38節で、

「わたしのために命を捨てると言うのか。はっきり言っておく、鶏が鳴くまでにあなたは三度わたしのことを知らないと言うだろう。」

と告げられました。

その時、ペトロは内心、

『そんなことは無い。

イエス様と運命を共にする。』

と思ったに違いありません。それなのに今、

自分はイエス様を裏切ってしまったのです。

ペトロはイエス様に愛され、神様の御心を知って、人生が全く変えられ、イエス様のためなら、死ん

でも良いと、本気で思ったのでした。しかし、人間の根底には、自己中心、自己保身が本音として、根を深く降ろしているのです。その根から、神様も人も、真実に愛することが出来ないので、罪を犯して行くのです。イエス様は、その神様も、人をも真実に愛せない、罪の根を抜き去って、御自身の愛の根を植えるために、人類の罪を一身に負って、身代わりの十字架に架かり、真の愛を与え、また、示されるのです。

ヨハネ I の手紙、3章16節に、

「イエスは、わたしたちのために、命を捨てて下さいました。そのことによって、わたしたちは愛を知りました。」

と記されている通りです。ペトロは自分が、

「イエス様のためなら命を捨てます。」

と豪語したとき、イエス様が自分の罪を負って身代わりの十字架に架かって下さることなど露ほども知りませんでした。しかし、イエス様は、ペトロのその先もご存知でした。

イエス様は復活されると、ヨハネ21章で、ペトロがイエス様の弟子に呼ばれた、あのティベリアス湖畔で再会して下さい、ペトロに三度、

「あなたはわたしを愛するか」

「わたしの小羊を飼いなさい」

と言われました。

あの自分が三度否んだ罪を消すかのように、イエス様は三度、愛を問うて下さったのです。そして、赦しと、使命をお与えになりました。ペトロはその後、イエス様の愛と赦し、宣教への派遣を受けて、聖霊により、イエス様との愛の交わりに生きて、イエス様のために、命を賭けて働き、遂に、イエス様のために殉教しました。

イエス様はペトロの裏切りを予告されましたが、また、彼の立ち直りも、

「後についてくる事になる。」

と予告しておられました。イエス様の十字架の贖いによって、許されない罪はひとつもありません。私達がどんなに努力しても、抜きとることの出来ない罪の根、

『どうしてあんな事をしてしまったのか。』

と悔やみ切れない罪、無意識に犯した、自分では気付かない罪。イエス様はわたしの全ての罪を引き受けて、身代わりの十字架に架かって、私達に罪の赦しをお与えになったのです。私達もこの、一事を信じ、イエス様に賭けて、イエス様の愛に生かされて、また、イエス様の愛に応えて、イエス様に従っていく者とならせて頂きましょう。

お祈りを致します。

憐れみ深い天の父なる神様
主にのみ、十字架を負わせまつり
我知らず顔でいる、この罪をお赦し下さい。

受難週のこの時

イエス様の十字架の苦しみは
我が為であった事を深く思い、
罪を清めて下さり、
イエス様の愛に応える信仰と愛を
与えて下さる様に、心からお願い
致します。

尊い救い主、イエス・キリストの
お名前によってお祈りを致します。

アーメン。